

ブドウ「甲州」のルーツを訪ねて 中国の各地歴訪

東京農業大学
佐藤 幹夫

1995年9月 中国新疆ウイグル自治区の「和田^{ホータン}紅」と呼ぶブドウがあり、これが「甲州」の祖父であろうと聞き、この眼で見たいと数人で出かけることにした。

成田を発ち3時間で上海に到着、ここで中国新疆航空に乗り換え、5時間かかって新疆ウイグル自治区の首都ウルムチに着陸。ここで1泊。

中国は東西幅が3000km以上にも及ぶが北京時間が標準で地域による時差はない。ウルムチでは夕方8時を過ぎないと暗くならない。ここで先ず気がついたことは生活がすべて2時間遅れになっていた。仕事への出勤は朝10時、退庁時間は夕方7時、やはり明るさにあわせての生活かと感心すると同時に中間の地域甘肅や四川ではどうしているのか気にかかった。ウルムチでは市営の葡萄園を見学した。入場料を取って園内に客を入れ、ブドウの樹の下でブドウを試食させるタイプの観光園であった。無核白、ニューナイ、新疆紅など中国品種のほかに巨峰芽変、早生高墨など日本の巨峰系品種があり全部で24品種を持っているとのこと。1kg近くの大きな房が沢山着いていたのが印象的であった。

次の訪問地はここよりジェット機で1時間45分、新疆ウイグル自治区の西端キルギスタンとの国境の町カシュガル。カシュガルとは「川辺の緑の中にある家」という意味で、緑豊かな2000年の昔から栄えた町、西はキルギスタンへ、南はパミール高原へ通じる交通の要点。町の人口は30万人で、住民はウイグル族(70%)のほかにタジク族ウズベク族、カザーク族など13の民族がここに居住している。農産物はとうもろこし、麦、綿など。大陸性で夏暑く、冬は寒い。年間の雨量は160mmと少ない。パミール高原からの雪どけ水を



写真1. ポプラ並木 (カシュガル郊外)

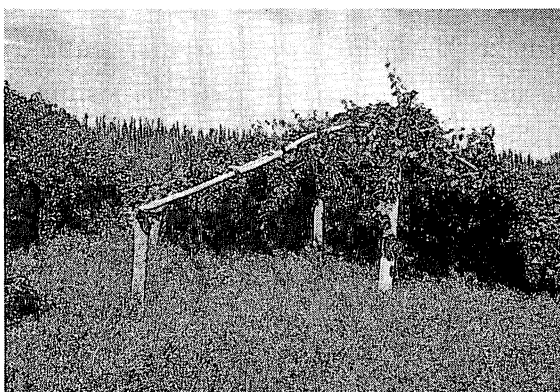


写真2. ブドウ棚仕立て (カシュガル)

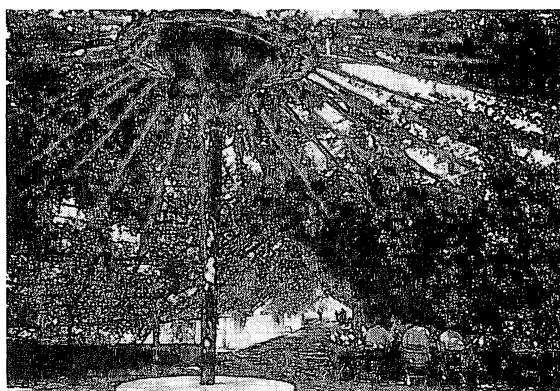


写真3. ブドウの下で休憩

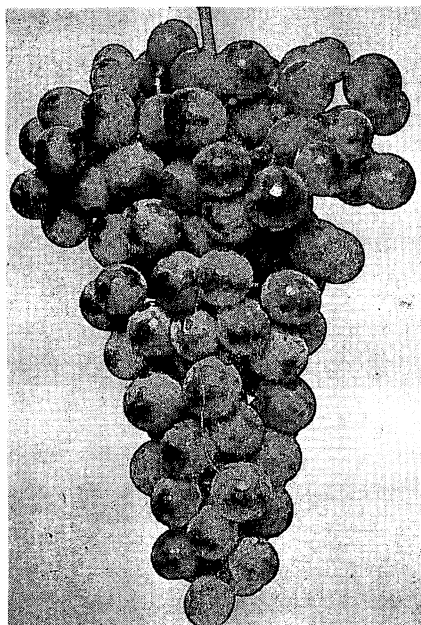


写真4. 甲州 (山梨)

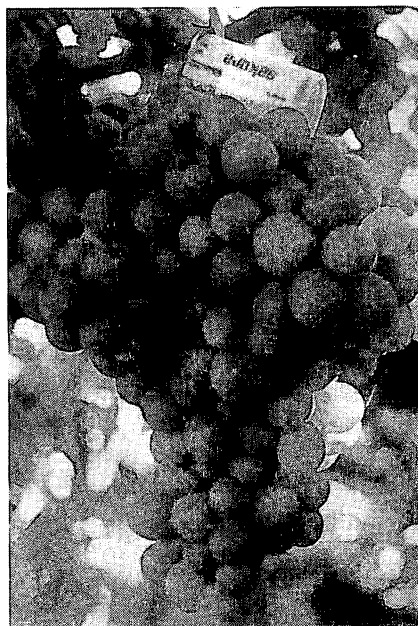


写真5. 龍眼 (中国河北省)

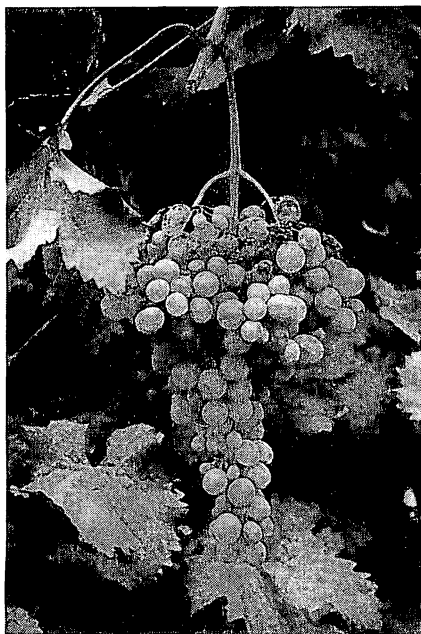


写真6. 和田紅の1系統
(房型が甲州に似る)



写真7. 和田紅の1系統
(房型が龍眼に似る)

利用している。道路の両側には灌漑水路がありこの水路の中に並木が植わっている。郊外の道路はポプラ並木 (写真1)。市内の道路はニレ、ヤナギの並木であった。ここでも国営農場を見学した。ザクロ、ブドウ、プルーン、モモ、ニンジン、ピーマンなどがあったが、ほとんど放任栽培のようであった。果樹の根元には水がたまってお

りその様子は水田に果樹が植えてあり、我々はその畦道を歩いているような状態であった。ブドウは傾斜した棚で栽培していた (写真2)。園内の中央部にはブドウ樹を大きなドーム状に仕立て、テーブルを配置した休憩所があった。我々もブドウ数品種を試食しながら一休み (写真3)。すると隣のテーブルの女性グループが歌を歌い始め、

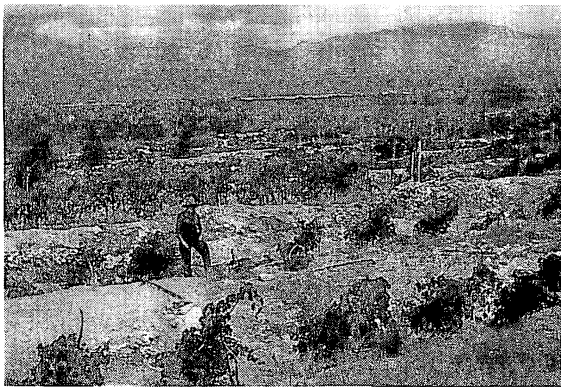


写真8. 龍骨仕立て（龍眼、幼木、中国河北省）



写真10. 龍眼、傾斜棚仕立て
非常に豊産である（中国河北省）

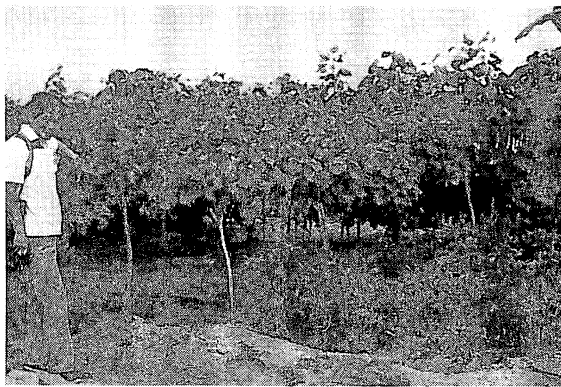


写真9. 龍骨仕立て（龍眼、成木、中国河北省）

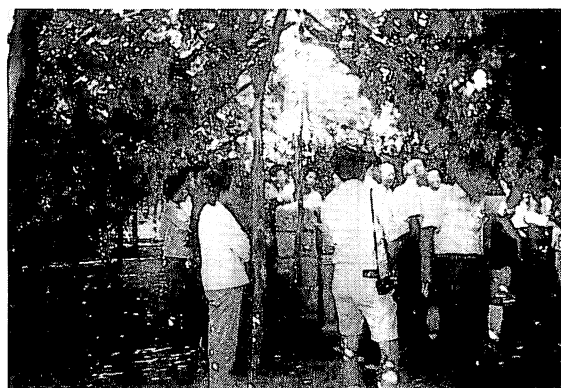


写真11. 龍眼、盃仕立て（中国河北省）

また踊りも加わった。日本から来た我々に対する歓迎とのこと。ウイグルの人は陽気で子供の時から歌と踊りが大好きで上手。我々は拍手のみでお返しの踊りができなかったのは残念であった。

ここから、東南方向へ西域南路と呼ばれているシルクロードを車で11時間450kmのドライブ。砂漠の中の町和田（ホータン）を訪問。この付近に栽培されている「和田紅」を見るのがその目的。和田農業試験場の見本園に栽植されている「和田紅」を新疆農業科学院園芸研究所所長 楊承時氏の説明で見せていただいた。約2000年前に張騫が西安に持ってきたブドウはこの品種と思われる。当然種子を持参したと考えられるので、「和田紅」の実生が現在華北地方にある「龍眼」ということで、「和田紅」は「甲州」の祖父になる。「和田紅」の茎、葉型は「甲州」そっくりであった。楊氏によると「和田紅」は房型の違う7系統がある由。熟期も多少異なり、見学時に我々が見ること

の出来たのは4系統であった。「甲州」に似た房型の系統、「龍眼」に似た房型の系統があったことは興味深い。また楊氏の話では「和田紅」の親と思われる品種がさらに西のイランアフガニスタンにあるとのこと。植物の外観形態、花粉の形態などから親子関係を調べたいとも述べていた（写真4、5、6、7）。

ところで、中国の文献によると、漢の武帝の命令で張騫が西域地区へ出かけ13年後に帰ってきたとある。紀元前126年のことである。この時、持ち帰ったものがブドウ、馬、苜宿（うまごやし）と言われている。しかしブドウの記載が古文書に現れたのは張騫没後10年である。張騫の西域派遣をきっかけにシルクロードを通過しての人の住来が盛んになり、ブドウなどがもたらされたものと推察できる。

次に、「甲州」の伝来については、福羽逸人の「果樹栽培全書」によると甲斐の園の住人雨宮勘

解由が文治2年(1186)八代村城の平地(勝沼町岩崎)にヤマブドウと異なるブドウが生えているのを発見、これを持ち帰り栽培を始めた。これが甲州ぶどうの起原と言われている。

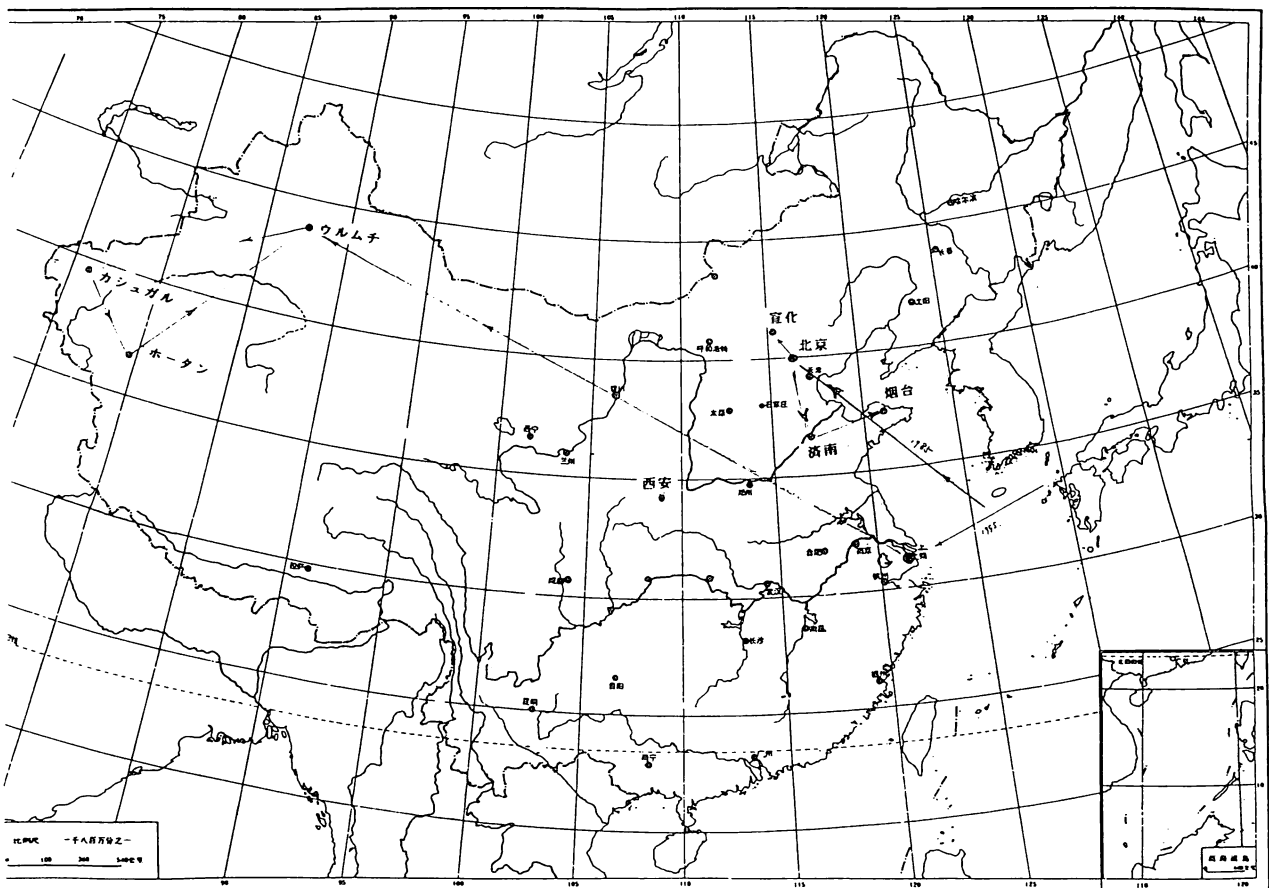
また、一説には僧行基がこの地に大善寺を建立し、その時にブドウの種子を蒔いたとある。時は養老2年(718)のことである。しかし、「甲州」がこの時期に存在した確証は現在発見されていない。古文書に記載されている甲州ぶどうの最初は文治2年である。

諸形質より見て「甲州」は「龍眼」の実生であろうと思われるが、7~9世紀に派遣された遣唐使か、あるいは民間人により持参された種子、或いは鳥などによる伝来と推察される。筆者は約10年前、「龍眼」の栽培されている状況を見るため

に、中国山東省済南、烟台、河北省宣化付近の農村を訪ねた。河北省の「龍眼」は見事な房であった。また農村でのぶどう栽培は龍骨作りと称している特別な仕立てかたであったが、これこそ棚仕立ての原形と思われた(写真8、9)。

房型よりみると「龍眼」「甲州」とは別系統の品種を思わせるが、「龍眼」「甲州」いずれの房型も「和田紅」にあったことは興味深いことである。国税庁醸造研究所の後藤らによる「甲州」の「DNA」解析の結果では、「甲州」は「龍眼」「和田紅」の直接の実生とは考え難く、他の遺伝形質が若干入っている可能性があると報じている(本誌第6巻3号)。

3品種の遺伝的関連を詳細に明らかにしたいものである。



中国全図